



institution	広島経済大学 (Hiroshima University of Economics)
Title	Little Dorrit 考 : 'Nobody' からの出発
Author(s)	田辺, 洋子
Citation	広島経済大学研究論集, 5(3): 19-28
URL	<a href="http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/handle/harp/2520">http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/handle/harp/2520</a>
Rights	

## Little Dorrit 考

—— ‘Nobody’ からの出発 ——

田 辺 洋 子

*Little Dorrit*<sup>1)</sup> という作品には、終始、牢獄のイメージがつきまとっている、ということはすでに語られてきた。確かに、舞台は Marshalsea 監獄がその中心であり、登場人物の行動、関心もこの焦点に集中している。しかし、さらに注目すべきは、彼らがほとんど一人の例外もなく、各自の牢獄に幽閉されているという事実である<sup>2)</sup>。当然、その牢獄は精神的で無形であるが、その抑留者の思考を規定する。William Dorrit と Arthur Clennam は現実に Marshalsea 監獄の囚人でもある。何故、各人物に固有の牢獄が課されているのか、という点については明らかではないが、Lionel Trilling が指摘するように、それは C. Dickens の幼年時代の経験によるばかりでなく、彼の人間の意志への問題意識<sup>3)</sup>にも関わってくるのであり、Dickens が、人間の心を閉ざす悪を牢獄の格子のイメージにし、そこから精神が解放されることを一つのテーマとしたためと考えられる。これは、彼が常に関心を寄せていた問題であったと思われる。彼の作品の多くはこのテーマを異なる形で内包し、それが最も寓意的に取り上げられ

- 
- 1) 以下 LD と略す。テキストは Charles Dickens, *Little Dorrit*, Oxford Illustrated Dickens (London; Oxford University Press, 1974) を使用。本作品、及び他の Dickens の作品からの引用の頁数は、すべて Oxford Illustrated Dickens による。
  - 2) E. Johnson はこの作品を ‘a story in which existence itself, for rich and for poor, for the imprisoned and the free, is seen as no more than confinement in a variety of jails.’ と評している。E. Johnson, *Charles Dickens; His Tragedy and Triumph* (New York, 1952), p. 839
  - 3) L. Trilling, “Introduction” to *Little Dorrit*, Oxford Illustrated Dickens (Oxford, 1952), p. vii

ているのが *Christmas Carol* だと思われるからだ。生前、自分の魂が、仕事場である ‘counting-house’ の外へ出なかった罪の報いに、その罪の道具である元帳、証書、南京錠の枷をかけられて Scrooge の前に現われる Marley’s Ghost は、心の牢獄の囚人であったことを目の当りに見せてくれる。“It is required of every man that the spirit within him should walk abroad among his fellow-men, and travel far and wide.”<sup>4)</sup> という彼の言葉は、作者の出した一つの結論とも言える。

しかし、この魂の釈放は、現実のそれと異なり、他人、或いは事態の力によってではなく、閉ざされた心自らによってのみ成されるものである。さらにそれ以前に、無形の格子の存在に気付くことが必要である。それは内面の自己との対話を多く持つ者にしか許されず、その認識なくしては、格子を破ろうとする意志は生まれない。この *Little Dorrit* の中で、最も誠実にその作業を続けるのは、Clennam であり、彼は自分の ‘weakness’ を越えようとして悩む。ここで言う ‘weakness’ は ‘crime’ ではなく、人間であるが故の弱点である。‘crime’ を犯しながらも、良心の苛責を揉み消そうとする他の作中人物の中で ‘weakness’ に悩む Clennam は生きることに誠実である。彼の心の動きを追うことで心の釈放の手段を探ることが本論の目的であるが、まず彼とは対照的な二人の人物 W. Dorrit と Mrs. Clennam、心の格子の存在に気付かなかった、或いは、むしろ気付くことを拒み続けた彼らについて考えることから始めることにする。

## I

W. Dorrit は本作品中、最も精彩を放つ人物だとしばしば評される。それは、彼が監禁された Marshalsea 監獄の格子以上に太い、彼の心の格子が鮮明に描出されているためである。その格子は ‘pretence’ (虚偽) の格子とでも名付けられるだろう。

4) C. Dickens, *A Christmas Carol in Christmas Books*, Oxford Illustrated Dickens (London: Oxford University Press, 1974), p. 19

彼は The Father of Marshalsea として同胞の囚人達から敬意を払われる。最古参であるという以外に、その謂れはないのだが、いつしかその称号故に、囚人達が彼に 'Testimonial' を貢ぐ風習が生まれる。彼の生計は、その 'Testimonial' と、お針子として働く末娘 Little Dorrit の賃金で賄われる。しかし、'Testimonial' とは名ばかりの施し金と娘が持ち帰るわずかな金で生き延びていると認めることは、彼には不可能である。その行為を弁護するものは、被害者としての自己の正当化である。かつての gentleman であり、今なお gentleman の気概を失うことができずに現在の生活を強いられている自分こそ被害者である。被害者である自分は飽くまで gentleman, Father という立場から囚人を引き立てているのであり 'Testimonial' はその返礼にすぎない。娘が外で働いているなどという事も、gentleman の一家にはあり得ないことで、自分はその事実は全く知らない。これが W. Dorrit の自己正当化であり、その手段としての 'pretence'<sup>5)</sup> である。つまり、gentleman であり patronize しているという 'pretence', gentleman の名を傷つける行為は全く知らない、という 'pretence' である。そのような虚偽の世界でしか生きることのできない彼は、莫大な財産の相続権を持つことが明らかになり、釈放され、一変して富裕な生活に入った後には、逆に囚人としての過去につきまとわれ、その露頭を恐れる。彼の目には、従僕さえも Marshalsea 全体、'Testimonial' すべてとして映ずる。囚人当時は紳士としての過去をひけらかし、紳士となった今は囚人としての過去に脅える。常に虚偽の中に生きているからだ。この 'pretence' に阻まれては、彼には最期まで Little Dorrit の真の姿を見ること

5) これらの pretence はさらに奇妙な形で Blandois, Mr. Casby に具現されている。前者は自称 gentleman の殺人犯であり、E. Wilson の言葉を借りれば 'a caricature of social pretense' である。E. Wilson, *The Wound and the Bow* (New York, 1947), p. 56 また後者に関しての、'he disposed of an immense quantity of solid food with the benignity of a good soul who was feeding some one else' (LD, p. 158) という描写は 'bestowing his life of degradation as a sort of portion on the devoted' (ibid., p. 230-231) という W. Dorrit の描写に符号する。

は叶わない。父親の身の回りの世話のできた *Marshalsea* 時代しか現実と思えない彼女を、屈辱的だと非難し、被害者意識を盾に取るのもそのためである。

この *W. Dorrit* と対をなすのが *Mrs. Clennam* である。彼女は手足の自由が利かず、十五年間、車椅子から離れられない生活を送ることを余儀なくされている。しかし、彼女にあって拘束的なのは、車椅子という牢獄ではなく、*W. Dorrit* の場合と同様に、被害者意識、それがもたらす ‘*pretence*’ である。夫には、自分に隠した女性（実は *Clennam* の本当の母親である）がいたことを知って以来、彼女は屈辱の犠牲者となり、被害者としての復讐が始まる。夫とその女性の仲を裂き、二人の間に生まれた子供を引き取り、その子にある子供らしさの芽を摘むことが彼女の報復である。結果的には、その女性を半狂乱にし、夫を絶えず威圧し、*Clennam* を得体の知れぬ罪の意識がもたらす憂うつに陥れるのだが、その事態の責任を、彼女は過つ人間に似せて彼女自身が造った神に転嫁する。神聖が汚され、神がその償いを求められたのであって、自分はその媒介にすぎない、というのが彼女の主張だが、そこには欺瞞が溢れている。“*I am humbled and deceived!*” と思わず言ってしまった直後、同じ息の内に、“*...Not I, that is to say, a greater than I. What am I?*” (p. 779) と言ひ繕う所に彼女の苦しさが窺われる。神が発動者であり、自分は単なる手先だという ‘*pretence*’ を装っているのだ。自分の作り上げた格子で動きがとれず、罰したはずの自分が、最も重く罰されるという皮肉な結果が生ずる。

*Mrs. Clennam* の ‘*pretence*’ は ‘*self-depreciation*’ (卑下) という形を取り、その点で *W. Dorrit* と異なるが、二人の心を束縛するのは等しく ‘*pretence*’ だと言えるだろう。現実の中で受けた苦しみから逃れるために虚偽の中に閉じ込められた彼らは、自らの看守<sup>6)</sup>であり、彼らをその苦痛から

6) ‘*But Mrs. Clennam is both prisoner and jailer;*’ は *E. Johnson* の言葉であるが、彼のここでの指摘は、彼女が夫と息子にとっての *jailer* となっていることにとどまっている。*E. Johnson, op. cit.*, p. 886

救うものは現実の死でしかない。

しかし、一方で、受けた苦しみから抜け出るために虚偽の世界に逃避するのではなく、現実の中で傷ついた自分に対処し、その自分を言わば殺すことで、その苦しみを克服しようとする人々がいる。次に彼らについて考えてみることにする。

## II

A. Clennam は父の死を契機に、インドでの事業を締め、二十数年ぶりでイギリスへ帰って来た。彼は、“I am such a waif and stray everywhere, that I am liable to be drifted where any current may set.” (p. 20) と言い、意志も、目的も、希望も持たないと言う。しかし、この言葉をそのままに受け取ることはできない。<sup>7)</sup> 生家での冷たい応対に見せた彼の涙は、‘all its (=his nature’s) hopeful yearnings’ (p. 32) が失われてしまっていたわけではないことを証明したし、苦しい生い立ちによっても枯れることのなかった鋭い感性を物語った。また、テムズ川の流れの彼なりの解釈は、彼がすでに *prison* とは反対の状態を持つ川への恐れを抱いていることを示す。彼には川が次のように囁くのが聞こえるからだ。

Year after year, so much allowance for the drifting of the boat, so many miles an hour the flowing of the stream, here the rushes, there the lilies, nothing uncertain or unquiet, upon this road that steadily runs away; while you, upon your flowing road of time, are so capricious and distracted. (p. 191)

この歌は印象的に繰り返され、作品の *tone* にもなっているのだが、彼が川を見て思うのは、前言のように、川のなすがままにされる ‘waif’ や ‘stray’ になることではなく、川のように ‘insensibility to happiness’ (p. 200) を払う代償に ‘insensibility to pain’ を得ることである。‘insens-

7) L. Trilling も Clennam の中に ‘will’ と ‘energy’ があることを認めている。

L. Trilling, *op. cit.*, p. xii

ibility to pain' という一見消極的とも思われる願望は、'reserve and self-mistrust' (p. 760) という自分の格子をすでに認識している彼だからこそ、その苦痛から免れたいために起きるのであり、そこには積極性への萌芽が認められる。<sup>8)</sup>この萌芽が具体的に行動を伴って現われるのが、彼が、Minnie Meagles への失恋に直面した時である。

Clennam の恋した Minnie は、別の男性に心ひかれ、不幸な結婚生活を送ることになるのだが、彼は彼女への思いを断ち切るために、心の中で自分を 'nobody'<sup>9)</sup>にしてその苦しみを乗り越えようとする。彼には被害者意識はない、むしろ苦しんでいる事実すら、不当なものとして否定しようとする。彼は Minnie に恋をしないことを決意するが、その決意の揺らぐ度に心の中で呟くのは、「自分は恋はしないと決めたのだから…」ではなく、「もし nobody が恋をしないと決めていなかったら、話は別だが、」である。前者は強く自分を意識した考えであるが、後者は恋をしている人間など存在していないという前提の上での発言である。もちろん、彼が恋する自分を認めないことで思いを断ち切ることができた、と言うことはできない。むしろ、'nobody' としての自己との対話の中にこそ彼の苦しみが窺われるのであり、それは、彼女の結婚が確定して初めて、しかも、'all his inconsistencies, anxieties, and contradictions' (p. 403) の末、'nobody' を消すことができることでもわかる。存在しないからこそ 'nobody' と呼ばれるべきものを消す、ということは 'nobody' は何らかの存在であった

8) 彼は無気力、無意志という点で *Our Mutual Friend* (以下 *OMF* と略す) の Eugene Wrayburn の前身とみなされることが多いが、“I know less about myself than about most people in the world.” (*OMF*, p. 285) と言う Wrayburn に比べれば、はるかに自分の心の 'secrets' (*LD*, p. 760) を直視することに神経を使った。その意味で、本論で後に述べるように同じ *OMF* の John Harmon との類似に注目したい。

9) Mr. Pancks は秘密裏に Dorrit 家の財産問題を調べ始める時、Little Dorrit に向って “I am nobody.” (*LD*, p. 289) と言い、無償の奉仕をする注目に値しない人間となることを宣言する。ここで用いられた 'nobody' という言葉には Clennam にとっての 'nobody' に通じる意味があると思われる。

ことを意味する。その存在とは ‘nobody’ になりたくてもなり切れなかった他ならぬ Clennam である。自分を ‘nobody’ と呼ぼうとする人間の thought-pattern は言わば ‘self-contradiction’<sup>10)</sup> であり、‘self-deception’ とは区別されねばならない。そこにも、自意識から逃れられない弱さはあるが、重要なのは、‘self-contradiction’ という過程であり、その過程の中にこそ ‘the modest truthfulness’ と ‘some quiet strength of character’ (p. 309) があると言える。さらに、彼が Minnie を完全に断念し得た時の心の平穏は、そのような自虐的とも言える彼の心の処置の報償に他ならない。

Between the real landscape and its shadow in the water, there was no division; both were so untroubled and clear, and, while so fraught with solemn mystery of life and death, so hopefully reassuring to the gazer’s soothed heart, because so tenderly and mercifully beautiful. (p. 333)

彼の心理状態は、そのまま彼の見た光景に投影されている。ここで印象的に描かれているのは ‘rest’ であり、作者自身の望んだ世界とも二重写しになり<sup>11)</sup>、天国までも喚起させる。

10) John Romano は Clennam の心を self-contradictory と呼んでいる。John Romano, *Dickens and Reality* (Columbia University Press New York, 1978), p. 102

11) “Too late to say, put the curb on, and don’t rush at hills, ...the wrong man to say it to. I have now no relief but in action. I am incapable of rest. I am quite confident I should rust, break, and die, if I spared myself. Much better to die, doing. What I am in that way, nature made me first, and my way of life has of late, alas! confirmed.” E. Johnson, *op. cit.*, p. 882  
Dickens 自身のこの言葉は、LD 執筆時における、彼のイギリス行政体制への完全な不信の念と、私生活での妻 Catherine との結婚生活の究極的な破綻の渦中にある彼の苦悩を物語る。その苦悩にあつて、彼は ‘rest’ を見出すことができないのであるが、その不可能な ‘rest’ への希求は、それを Clennam に達成させることで、わずかな解決を見ようとしているのかもしれない。彼自身は ‘action’ の中にせめて ‘relief’ を求めようとするのだが、それは、成果の中よりも行為の中に救いを求めようとする Clennam の姿にも反映されている。



以上述べた Clennam の姿勢は、先の W. Dorrit と Mrs. Clennam の姿勢とは大きく異なる。自分の苦しみを否定し、苦しむ自分を否定する態度は、苦しみを誇大し、苦しむ自分を弁護するそれとは全く異質だからである。

Clennam と比較すれば、はるかに無意識的であるが、失恋の痛手に対処するために、彼の執った処置と本質を同じくする解決策を講ずるのは、Little Dorrit に失恋する John Chivery である。彼は Clennam ほど内面を透視し、分析する目は持たないが、他人にも自分にも誠実であることでは劣らない。彼は Little Dorrit に愛されていないと思い知らされる度に、心に墓碑銘を刻む。例えば、次のようなものがある。

‘Here lie the mortal remains of JOHN CHIVERY, Never anything worth mentioning, Who died about the end of the year one thousand eight hundred and twenty-six. Of a broken heart, Requesting with his last breath that the word Amy might be inscribed over his ashes, Which was accordingly directed to be done, By his afflicted Parents.’ (p. 220)

失恋の墓碑銘は幾度となく刻み返されるが、その一見 pathetic で humorous な行為の中に、Clennam が ‘nobody’ になるためにしたと同じ葛藤の軌跡を見出すことができる。失恋した自分は死んだと言いつつも、いつしか再び生き返って失恋している Chivery は “If nobody...” という仮定を繰り返す Clennam の parallel であり、彼の場合は碑銘という、さらに直接的で単純な自己を葬る形でその打解策を見せている。彼は幾度か碑銘を刻んだ最後に ‘FOR THE SAKE OF THE LOVED ONE..., AND BECAME MAGNANIMOUS’ (p. 734) という碑銘を残す。恋の disappointment を味わう毎に、死んで墓を建てた結果、magnanimity をつかんだことを示している。

自分が無い状態の心理を仮定し、それに近づこうとする意識は、OMF の John Harmon において最も極限的に提示される。彼は故国イギリス

へ帰った時には、すでに死んだ人であった。彼の服を着たまま水死体となって浮んだ遺体が彼のものと誤認されたために、彼は必然的に ‘nobody’ になったのだ。自分は死んだものとして動く周囲の状況の中で、彼は自らを ‘the late John Harmon’ (*OMF*, p. 374) と心の中で呼び、生きながらに死んだ男、‘the living-dead man’ (*ibid.*, p. 373) となる決意をし、恋に限らず、財産、地位、愛情に claim を持つことを断念する。敢えて名乗り出ないのは、進んでその苦境を受けとめる覚悟のためである。

Clennam は失恋にあたって見せた誠意を、企業運営に関しても見せている。新奇な発明をしながら、‘How not to do it’ を主義とする Circumlocution Office の政策に阻まれて日の目を見ることのできない Daniel Doyce を支援して Clennam は共同出資者となり、その発明品を世に出そうとする。‘The thing is as true as it ever was.’ (p. 190) という Doyce の言葉にも明らかであるが、Clennam を Doyce に引き寄せたのは、二人の中にある ‘truth’ への reverence である。‘truth’ を信じて企業に乗り出した彼に、Mr. Pancks が当代一の投機家である Mr. Murdle の investment に加わることを勧める。主義の上では反対の彼が、投資に踏み切るのは、Mr. Pancks の ‘Be as rich as you honestly can. It’s your duty. Not for your sake, but for the sake of others..... Poor Mr. Doyce depends upon you.’ (p. 584) という一言があったためである。結果的には、この投資は失敗に終わり、それがもとで彼は Marshalsea 監獄に入ることになるのだが、彼はそれを冷静に受け止める。彼には W. Dorrit のような被害者意識も、Mrs. Clennam の表わした怨恨もない。積極的に情勢に順応する意志は、自分を ‘nobody’ にしようとした苦しみの果てに得たものである。義務感に動かされ、他者を念頭に置く考えは、自分を無い者にしようという試みより、さらに積極的だからである。

しかし、倒産に際しては、それほどの integrity に動かされて行動した彼だが、入獄の段階では、余力を失ったかのように弱さを見せる。彼は Marshalsea を選択し、ここへ入るのだが、元来ここは、わずかの借金の返

せぬ貧しい人々の入れられる所であるから、彼としては、裁判上の手続きを踏んで King's Bench 監獄に入る方がふさわしい。“It is not worthy of the spirit of an Englishman to remain in the Marshalsea.” (p. 741) という Mr. Rugg の忠告にも耳を貸さず、“I wonder that if it's not worth your while to take care of yourself for your own sake, it's not worth doing for some one else's.” (p. 725) という Chivery の言葉も無視して、食事を取ろうとしない。他者のために行動を起こす ‘energy’ を失い、ふさわしさを考慮に入れることができなくなれば、生きることは意味を失う。Clennam は死だけを待つかのように牢獄で無為の日々を送る。そこを折よくヨーロッパ大陸の旅から帰国した Little Dorrit が、いままだ彼女の口にしたことのなかった ‘for my sake’ (p. 759) という言葉を初めて声にし、Clennam が彼女の愛に救われるのは、寓意に走りすぎているとも言えるが、最後に消極性に走り、再び彼の心の牢獄に戻った彼をつなぎとめたのは、彼がそれまで求め、Little Dorrit に具現され続けた真の意味での積極性だったと読みとれる。彼女を評して、Mr. Meagles は、‘one of active resignation, goodness, and noble service’ (p. 812) と言うが、prison で生まれ、育った Little Dorrit の心を Marshalsea の格子と無縁にしていたのは、その積極的な ‘resignation’ であり、それは Clennam の求めた ‘nobody’ の状態を出発とするものである。Little Dorrit に救われる寓意的傾向は Clennam の探した心の平和が現実の世界で手にすることが困難であることを示してはいるが、それは彼の心の葛藤の過程の価値を低めはしない。醜い自意識を捨て、置かれた状況の中で自分を葬ろうとする誠意こそ、彼の心の牢獄の扉を開く手がかりだったと言えるのではないだろうか。